

芝浦工業大学工学マネジメント研究科客員教授
谷口博昭

「道の駅」の制度が発足して以来20年余が経過、1059の駅が登録されるまでに好評を得てきている。当初の「休憩」「情報発信」「地域の連携」の3つの機能に「防災」機能を加える動きや「地方創生」

点から線・面への視点を勘案しつつその在り方を検討し再構築することが大切だ。

手元の新漢語林によると、『道』は行十首。音符の首は、くびの意味。異民族の首を埋めて清められた、みちの意味

「道」と「駅」の原点から

の拠点にする動きがみられることは時代の要請に沿ったものである。「道の駅」が新たなステージへ進化するには「道の駅」を「道」と「駅」に分解し夫々の原点に立ち返って、

を表す』とある。フロンティアを拓いた「道」に畏怖の念を抱いて接していた様子、更には感謝の念が読み取れる。待望久しかった高速道路も、供用されるとその恩恵を忘れ

他地域のミッシングリンクに對する理解や支援を期待できない昨今隔世の感がある。

『駅』は馬十尺。音符の罫（えき）は、つぎつぎにたぐり寄せるの意味。馬を次から次へと手繰る様にして乗り継ぐために用意された所、宿場の意味を表す』とある。「駅」といえば当初「停車場」と呼ばれた鉄道の駅の感があるが「駅」のルーツは道にある。

「みち」には、道の他、路、途、径、美知、未知等の字が当てられる。みちの「み」は接頭語、「みち」は「ち」である。「ち」が交差し分岐する所が「ちまた」で、「ちまた」が賑わい、そこに市が出来、集落が出来、「まち」が形成されてきたことが読み取れる。「みち」がネットワーク化され「ちまた」や「まち」が更に発展することを期待したい。

また、新漢語林によると「地方創生」が望まれる。

また、新漢語林によると「地方創生」が望まれる。